

4 まとめ

今回の調査では、文学研究科在籍者（約 1650 人）の約 1 割にあたる、161 人からの回答があった。その内訳は学部生 44、大学院生（修士）41、大学院生（博士）31、教員 21 であり、学部学生よりも大学院生の利用が多いことが窺える。利用目的は、図書・雑誌の利用が圧倒的に多く、図書館利用時間に占める資料利用時間の割合が大きい傾向にある。

文学研究科在籍者について、身分ごとに重視するサービスが異なることがわかった。学部学生の場合は参考図書の充実や資料のわかりやすい配置、大学院生（修士）の場合は貸出冊数・貸出期間、大学院生（博士）の場合は複写機の使いやすい配置および雑誌・電子ジャーナルの充実、教員の場合は雑誌・電子ジャーナルの充実の割合が比較的高い。また、教員の評価が高く、最も利用の多い層である大学院生（修士）の評価は厳しい。

開館日・開館時間の拡大や図書の充実を望む声が最も大きい。また、自由記述意見からは、他学部所属者からの入庫の要望も挙がった。職員の対応、図書館の環境については期待値・評価値ともに高かった。

カウンター配付による広報の回収率が高く、机上配付も大いに有効である。研究室からの回答も多い。文学研究科構成員比から考えると学部生の回答数が少ないため、広報を工夫する必要がある。今回は、とくに自由記述欄に書かれた意見に対して回答を与えることで、利用者に真摯な態度を示すとともに、職員が問題意識をもち具体的方策を明確にすることができ、有意義であった。

参考資料

自由記述全意見、自由記述への回答、集計結果報告、ポップ、アンケート用紙